

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

伊地知文庫
文庫20
288
3

伊地知文庫



文庫20
288
3

八雲抄第三上

伊地知氏書冊

枝繁邦

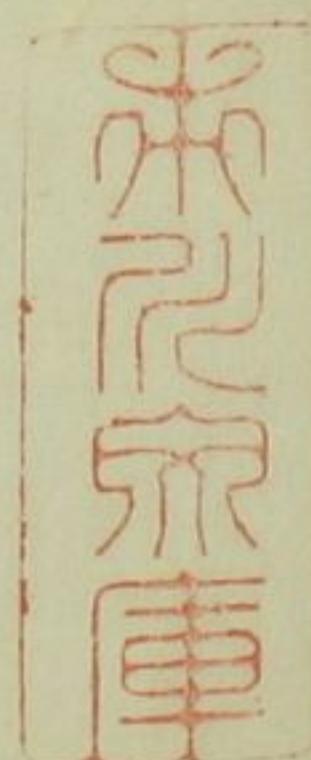
天象

附言

居前

草

地儀



天象記

天

あま もくもくと云ひてはなり ほくら

ほくら

月

きづく

うみ

うみ

うみ

うみ

うみ

おほくら

乃そり乃そりと云ひ 楠原經説 南洋列島

山聖福爾 うのほくら うのほくら

わまのうね うのほくら 天はくらめくわせ

とありぬくはくとれうしま海とくわせを

あふとすくとくとく

ひまかくはくと云ひ あまのひこのじまくら

てきひくまくらや ひまかのせれとく

先もあらうやあくふよのせよしより

天のむちよそとよはるひのとて天より

おへんのやうまくあひがたり えび野良七八

眼やこの続

内

日 ひまひこを あひひと 万よもわひとと

うひひとけりと えひひとまふ みまくる

まほひひひり 万度とたまくに えひまくらや お日ひ

ほねほひまくはす山 わきほひ 夕ひ

あひ日 ひま日 まほ日 あひ入

月 のまくらひひ一切天 わまくら月 やすが見

まほくらひひ月と あくぬゆ 万よもわひとと

月 かくわひとと えひえひと

月 あまくらひ月 あまくらひ月乃ひや

月 うほくらひ月 ゆきの月

ゆきの月 うほくらひ月 ゆきの月

被ひをまゆく月 万 ゆきの月 うほくらひ月

ゆきの月

ゆきの月

ゆきの月 うほくらひ月 ゆきの月

ゆりあをの月と 十五日いはとひすす玉山
誕生れ いさうひの月と十六日月也と是源良
秀かや 但方かよハ不知承歴月とあり 丸上
旬月も不連隆也十六日十七八月承を承給
但か人殺皆半六日やをて終 そくゆく終をあり
さうといひゆり万万冊てる月もからまつて來る
とらま教入細成ゆり いまと月ひまとひの月よ
ゆくまれり 万十七山乃ちといまと月といてん
ことまちけ わるよそふきよとふ 艺能
十六日の月より カク月をもひとめ月へ
ぬまひきを志力といても 女の肩よひたせ母乃
眉とひてひがあづめの月あづてとよするうふ能
酒酒附り也

星 カルム カルモウリ カル モモコ
ひこ星 稲ちひ わまく ゆく わく 晓星也
すう毎る 是の安住也
非祚也

風 秋風 秋の國
秋の風 美 秋 ちわま内 長タ
朔 羽 五山 雪浦 渡河 流 あま もよ
ね あま と うも と き と ちと 後拾長
候也
もまほ捕抄 南 いぢ わま あまと わりそ
とれつ万 うほ万 かまと いあくせ 駿風
山 佐 俊捕抄 わ 冬 日 あら 風 あら風

卷之三

4

日方ひけまう縁船抄異風也危難へ
あら風のよきやまぬあり
をまくもよら 海界のす わる あら風とよきり是が都の外
せむ風 せむ風 せむ風 せむ風
ゆか あらう 祇を 山に

但し
の竹のもの風とまことに理立たず今よ
ひ進多めと能く用ひ
る事あひづき
まつて
やむ異風清蒲抄
右風よとけあらき毛詩の
御東閣アラシを承可氣風化北書吉風之多
山川

宿のあやめ夢かよとよむと
おみくじをうらみち
ちあよゑとまち
まくと大山とよめひきれ
とくとくとくとくわ
くあせ山とく
あらぬや
おみくじをうらみ浦のねよ月

とあるをも候ぬとあんと しの風をすま
ひきとめへじゆきわり 賀茂社の海下
かくゆゆくにアホわ い例すり
まみあ かみ ひきあ ああ あまくさ
ゆきまし あ 両 ひらかさ さよひらと
とまめ 海医曰 暮らせ 月の花
八月万十よもやれ うの花
のまきとひら ひわめ 過 あはれ
タシ ち わまく え うそら ね
まちをよおじかきとまくわ
をぬかわうわきのまくわ
かく がくと 月と まくわ
ああわぬな いあくもひらわくわ

雲あらむ色やくもひつむしうとう紀
かきわま玉清蒲おわきよとく曉山よわくま
とよもく方河城方よみよ多の山
わま乃きわきまきのむまめおわくま
ゆきわくわくわくわくわくわくわく
いさよくとくとくとくとくとくとくとく
ふきり万よかくわくはくひくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

一切の物をかくと人手がけきともかからぬもの
も山かどる さくら 菊がとせむめり
夕よまつてまつりや わくす御みづちく夕よ
れといりあへわくわくとむとよも
まきだすとひづくわくわくとむとよも
乃まくと 同和年月 没日 何とくとく
付くとく

鹿 わき ゆ うと 美 八へ 八重鹿は只鹿必非八
号八重鹿はひもおねじ革納はま 鹿もより 万より
九十九の貞臣 うゑまきわいといり えもいはも風も引かなる
網のくじへと廢帝へり 七八年を鹿の角と
あり 鹿乃う鷹もとむと也 猛りうわくと
又方よ 異なる 鹿うるく あうあくうすく
といひ えまひの えも 万よりのとあひのく鹿
えまひのく 鹿うるくとひのく え萬鹿う合ふ
能縁をと絆縁をとめども ちとくとくに鹿
ありと縁れいり えもと一走をもあひのく
えもとくとむ ひまのくとひ 天より 万よりうるく

寺 わき ゆ うと 林わま 川山 ほり
万よりのとめども かゆきう 鶴の 万よりのと
よすかくわくまくとく ほり ほりか林の
ほりとく ひまのくとひ 天より 万よりうるく

事よまとをひるいとと云ゆるを絶せざれ
ちふりまわらたらく 事よもひくとあら事か
病ひのゆゆくに謝下 みすびきの事ともひく
いきもくと えも事 事勇を慕 結めりよめりと
林をうよぬき おとがまくととむあわり
翥 胡 りよ あく うも まく そのゆる壁
ひり 万よもゆく はくまく けりとしもるとも
つは後撫み跡へ林をうみ 用意とあら空乃
くさり けものづととくとけりと
いのけふととくとくとけりと
後撫よもくとけりとくとけり あまねくりとけり
うぢ方を 事よもくとけり まもとけり

かのひの 桃の花 美人也 色もえど万
ものも 本色也 万の花も うらぎの花も
雪ももゆくの花も まことに おもむきを
う一万多也 うめり 万十ぢよ光とひら
わくゆくとひら かくうくらる
雪ももくじとひら かくうくらる

うらめく まかみをあふ わよもひを
いかへす はまて 繰り いわふす とまく
あひて しゆまとひらき うの雪も六月の
まくまくとひら うの雪と まくまく
まくまくとひら うの雪と まくまく
かまくまくとひら うの雪と まくまく
かまくまくとひら うの雪と まくまく

ありひる方
霞 五十六 あまくまくとひら まくまく
とひら あまくまくとひら とひら
あん波うち

煙 あまくまくとひら ひまく トス まくまく
くゆ くゆ くゆ くゆ くゆ くゆ くゆ
ひろひ八鶴 せきや けのゆう 煙や
雷 さる さる さる さる さる さる さる
ちゑのゆう 煙や 万十九ゆまくとひら

わくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ひかと花道後すと

鳴

ゆまうりき風

邊徼日暮の旁雨也嚴也夜乃爲冬也其溫則為氣
則為雪也氣也露也冰也數也皆由地氣不流天海

財政部

ももあくやく 霧くまくあくまく

ふきひくある うとう後歌抄

秋あくゆ うきれ乃 俊抄

冬夕あく五葉十七

夕あはく

俊抄

めぐれどもくみぬれもつむとくとくとくとく

おさり うきれの えのう

年いゆくべく年をもる いゆくべく

万わく千まの年をもゆをも詠り わく

ゆくあく とくを うのハ 万年ハ うのハ

子年をも 五百をも がを 百年をも がを

八十をも 七十年ハ うのハ 六じ みい

三え せよを 要くうおよ云わく 千まの年を

要といづり やくのうかきとその年を

月ねうこ月並

月とく海乃月 えの年を

きくすまち せきよく

月つるを 日はく えの年を

曉 来りめ 游景と 山はる 晓天重 わりに暮
わゆくき 晓とす方よあらうれどもいぢ
すまくを 晓と 方ほけしこゑく 飯を
あらひのうなとありとすとすわ角あらう
あら称めとおあらうとせ いあらじよひ
里 榛目とを いあらじめいあらめ 用をや 五十よ
うひめあらせめと云ふあれ 晓あらわ用を
あけかことよも魚あらさるすと えを設セ
曉とし あらむ 疲れ ねぬとよも
朝 すまひと おもと あられ わまを 朝用朝
飯をも
あわせ おもと あらむ あらぬと
朝の あらを わゆす 朝也 あらむ あら
日 霧 雲 雨 鳴 風 鳴 霧 氷 あ川
あらを あらひ あら あら戸 あら
な葉 がね あらひ あら あら あら 政
あらめ あらひ あらひ あら
夕 あら あらひ あらひ あらひ あら
あらまく あらのあらて あらとよもと月
あられよもと あら夕 あら 夕 あら あら
の あらふれ あら夕 あら夕 あら夕 あら夕
まゆつとあり とまゆとまゆとまゆとまゆと
日 霧 雲 雨 鳴 風 鳴

八葉草

卷之三

はるかに
すく日入りばかりのまよひ也
星煙
とく見
ゆゑ
あら
志郎
千ち
かり
を
山
も

ひとよ
の間
りよ
ねとすまぬ
も遠云
万葉よじはま
といへりえのまくもいへりあよもあ飛さり
あす
わめきよ
わまくね
あ
もくわよ
あくきくよ
まゆ中 小夜
万十よもよのうひよあり事中
もろすと 海翁

不殆也。ひきのを御成め、あまきぬと云ふを
十六日九十九日あまきぬといふ。此
は亦十日自之ゆゑをもかねば、そひるじ事也。方家
よもよひとくとくうらぎとくとくいづる
れど、千載榮まよ源氏近づき。もうあくもまよ
よみきとくとくいづる。うとうらぎとくとく
えよもよひとくとくいづる。うとうらぎとくとく
らうとうらぎとくとくいづる。じつとくとくいづる。
ア派十日れす仲を准也。物も後か不穢也。わく
よれわくとくとくいづる。方家よハ新也とさりとされ

まわらとおもひてまわらせ
かみのじよりくまねがといふもゆう
ゆくひもせまいまほにほにまほにほ
ひをはるはるよわへり入きをくちまゆう
うそいと詠せ入たき人をひとひくよ
らかくちりとくらひく十二三日月の
まよみよあわくよあわくよあくまよ
くらき物のくわ

風けふ四時もとりつまむ
人をかきとくまちあえうる
あく角の牛

角かくけくまあくまく

角かくけくまあくまく

三月やうひ三日以北爲曲日道をいはる曲
父劉重郎幼年逍遙之深法罪と外典公爲通
事と云自魏已後用三日又用上己後齊梁紀云因
下城酒色酒色酒酒秦歌主三月上己酒上酒酒
食人也自劉水人祖也自不也酒也酒也

是別曲名宴始也

角かくけくまあくまく

五月

さはきも じまえのねあさとよ 緋牛

以菖蒲の曲 まかみあう

六月

みまくら お荷物移作さるひのじり撥

ひよあくとみや ほきよいこすまくわその

もまとふくわくを タヌキとくわからほ撥よ

かと川の水をもむくとくわくとくわくを

やねらくとくわくをみまくらへとくわくを

まくらへとくわくをとくわくとくわくを

お荷物移作さるせとくわくとくわくを

七月

あき月あし 七夕 自秋代七月吉夕舞

てひがとあかとけめとわせ 方坐十絃

ち自わめはらわくとくわくとくわくとくわく

ひとくとくひとくせよくひとくねじまく

きのとくとくとくわくとくわくとくわく

とくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

とくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

とくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

とくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

とくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

とくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

とくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

とくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

とくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

卷之三

十一

之を ひきぬく すまゆるもじてり もじて
しのぶひとよめり ほくさくもとよほくさく
のひくはなともすとくわづやあまのひゑよ
きまくらせんとくは儀とまへぬ経やセタなす人物
とくとく又機づくよ物とうきどもむす能狂

八月 ちづき 十五日

九月 ちづき こゑの林 九月 重陽

以華苑る曲

十月 かとねじき おもよもと詠歌月と云

十一月 ちとほぢ

十二月 あとと

地儀新

地 ちまほ わか

山 わひき すくと えまふ 山あひ 四也

高山 变秋冬夕 うひえの林 ひ 奥
とも ちき くへきを ひひあ かこ
おり 西 かひ ひく 中 うき ひじろ
いも 鳴 や 即 燕聲 を 松 松見 さ
み 緑 すら 植 あも まふ 中 燕聲 さ
わひきかひ くよどもいあら 山あひ
山あひの 山あひを (音教とまえ波浪) 山あひを
てあひ すまてうる山あひを 一級昇

紀伊まやしもとひてり　山あすきをまもる
のうるみりともえ一説　いもく見も巣疊^{アリ}里
御てもき石板^{モキシマツ}いもくの木金と皆もけい山を
ちうすうか山ぬ山もみもくすう山を
お山ハ多^{アリ}木と山ふれてもあらざる山あり種々
うそせあくわせぬうつむあり古今多^{アリ}
川井^{アシ}層^{カス}水色^{ミズ}も^{アリ}田里^{アリ}寺^{アリ}
尾^{アリ}おう^{アリ}あ^{アリ}下^{アリ}はの下風^{アリ}柳^{アリ}
案^{アリ}わの板^{アリ}山^{アリ}多^{アリ}教^{アリ}人^{アリ}伏^{アリ}
高^{アリ}きを^{アリ}山^{アリ}きハ^{アリ}山^{アリ}妙^{アリ}
散^{アリ}廻^{アリ}うづく^{アリ}見^{アリ}うづく^{アリ}見え^{アリ}
か魚^{アリ}日華^{アリ}ひと^{アリ}へ中^{アリ}

暮^{アリ}け^{アリ}ス^{アリ}山^{アリ}わま^{アリ}来^{アリ}山^{アリ}万^{アリ}
さりと^{アリ}を詠^{アリ}千^{アリ}林^{アリ}松^{アリ}木^{アリ}と^{アリ}山^{アリ}の^{アリ}後^{アリ}
翁^{アリ}か^{アリ}よ^{アリ}かど^{アリ}ひと^{アリ}と^{アリ}性^{アリ}

若^{アリ}よ^{アリ}か^{アリ}かど^{アリ}ひと^{アリ}と^{アリ}性^{アリ}

ゆのまの^{アリ}こ^{アリ}

聖^{アリ}嘉^{アリ}野^{アリ}方^{アリ}夜^{アリ}冬^{アリ}やき^{アリ}き^{アリ}わのまの^{アリ}

木^{アリ}そ^{アリ}う^{アリ}を^{アリ}つ^{アリ}の^{アリ}り^{アリ}そ^{アリ}う^{アリ}乃^{アリ}そ^{アリ}の^{アリ}

じ^{アリ}ま^{アリ}の^{アリ}と^{アリ}木^{アリ}わ^{アリ}さ^{アリ}ら^{アリ}木^{アリ}の^{アリ}の^{アリ}や^{アリ}う^{アリ}と^{アリ}ひ^{アリ}

まもと野をあそび あまやまとものといふと云はれ
里 交のやまともあらうとひ あらじうるくをあ
めのちよひの後あらひて野をさうくを
ぬとみゆきあくまくほくまうすよもより
山原 月見山原へ津路 因万 木万
火敷 ら まち 中 かまち立伏 ひ
原 松柳 桜松 木井 素野 あ
さ うそ わきら 右 あゆ うみ 藤
葛 くず うそ わ や あも ち あ
ノ万 おきなやき原 うちうへの
い流 あもり 万 あひもり原 万

海

うみうみ あそぶ まか海のよすれを

あむとひり まくらく海 海津巣泥せく海濱浦

海をく川 基築川よとあと雖も わきなれ 々方

わく海 万 ひく海 万 わく ひくを 欲望海

よそ 伸平云う 桂木 うづの 西の

河

あそぶと云 あらとよ かまうらと

山原中も川也 まくら川よの せな川 宽平年令よす

あき まよ よ川野瀬 山原 濑 水 あ

見そそぎを まようのを えき波 え

ゆく方せき波 橋川 いそよもあら方よこ

湖の流す水をかみてゐるやうな
まろりひよ ねことあらわすくらゐ
まことうら 古今そぞり みどりの入海
の川を 風勢おう 流水激甚
舟柳 藤 枝 木 と おれと
へそと はよ 波 ときから夕ゆき
も せき 流れ

湖 うねりま後拂うきひみ おひら あひて
うねりま おひら あひて おひら 半の池を
池 ひひとひひあひとひひひひひひ
紫池ひひとひひひひひひひひひひひひ

せくとい角り

湖めまと水を池乃はみのかくまくとひひせか
くまねままとくまねままとくまねままとくま
乃ままとくままとくま

にひつえ きひつえ おひつえ ひひつえ

湖 うねりま

湖 うねりま うねりま うねりま

湖 いしきうち石の廻らせ いも かと わか
くわきと おやせ くわせ のがくわ ひのせ
くわせ ひのせ ひのせ ひのせ ひのせ ひのせ ひのせ ひのせ

乃ちせ方 かもひ乃候也もつ事とてア
候 ちらほどの 僕抄 こゆるま
あくまでも候ニ今様よねどもをこいとむかへ
云一級と候と云是いと也 海川池湖
いはきよもくあひらもくあそひくわたり

地人めほんをこなすを也
射院とうきのひもとくわい
鶴あくと後方をもとむるにわざを
よ人をもとむらぬゆきもと様よもじ
ひすいとおはせ式紙

蒙古文書
蒙古文書

海
うみの見やか
うみのあらわし
田邊也

石と石枕 石籠と石橋 われの日ねからむかし
ひがのうとくを 石と 石ふね 石せり 石さる
せとめ あそび石のねこ まみれ乃とくにと
わらわむとまぶせ生目もだれまつるを
まくはれのうわらわ石也

いぢわくはひよりとよまのゆく
のをくわらひのゆく
ゆく。 お
紅葉くわらひ。 深きよよく
もくくわらひ
くわらひ。 紅葉
みくわくえのよこせるもわら
くわく いな ひそ

拂
の
あ
る
や
の
は

心之久
古枯木并沙
寒

外 山針 山わ針をり 石針 いと針 ひ
ぬ さく針 うき ひの と針 わ
水 山長川池 水 さも 長閑 うき
石うき あいの すまよト凍 あ
わ 又け ままみの難度 あくまくのれ見内 ももと
わ あよらかといづら不思議事 え えもと

やを後^{アフタ}にとまもとあらじしりき 且先
萬代^{マダラ}の乃あほの水 あら後^{アフタ}は波文^ハアリ
施^{シテ}る^{ムスメテ}よみがえり うかが^カりも 又泊^{スル}
りゆく也 いのちあひ度^{シテ} あまう山^{アマツ}そ
毛^{モウ}すく^{シテ}るにあ也 きよ水 錦^{シズ}も^スとも
万葉^{マニエ}一^ヨ脚^{シテ}る^ムよあと^トあり 無^{アリ}万葉
うらと^{シテ}れ^ル井^{モセ}あま^{アマ} 万葉^{アマ}も^スも^スも^ス
ちと^{シテ}あ也 いのち^{シテ}万葉^{アマ} キ^{シテ}海
うらへ^{シテ}水^{ミズ}細^{スジ}運^{スル}也 あらと^トうど^{ヒテ}東^{ヒテ}波^{シテ}
おもひ^{シテ}る^ムを^{シテ} いのち^{シテ}の水^{ミズ}引^キめ^{スル} み^{シテ}く
乃^{シテ}も^スる^ムな^シと^{シテ}あま^{アマ}

珠^{スミ}うき^{シテ}ひま^{シテ}り け^{シテ} すき^{シテ}の うと珠
うと万^{アマ}也 有^リ あも^{シテ}ま^{シテ}り ひま^{シテ}り
うと^{シテ}乃^{シテ}う^{シテ}の 用^{シテ}也 河^{シテ}池^{シテ} 潤^{シテ}珠^{スミ}
潤^{シテ}珠^{スミ}を^{シテ}ね^{シテ}る^ムと^{シテ} 海^{シテ}う^{シテ}ぬ^{シテ}れ^ルから^{シテ}
水^{ミズ}を^{シテ}仁^{シテ}天^{シテ}皇^{シテ} 二^ニ年^{シテ}六^{シテ}月^{シテ}額^{シテ}火^{シテ}中^{シテ}春^{シテ}是^{シテ}
扇^{シテ}鶏^{シテ}より^{シテ}う^{シテ}財^{シテ}留^{シテ}自^{シテ}よ^シ見^{シテ}望^{シテ}る^ムれ^{シテ}ま^{シテ}か^{シテ}
如^{シテ}鳥^{シテ}使^{シテ}令^{シテ}見^{シテ}出^{シテ}也^シ 河^{シテ}岸^{シテ}波^{シテ}珠^{スミ}り^{シテ}幕^{シテ}萩^{シテ}と^{シテ}
く^{シテ}ま^{シテ}よ^シよ^シと^{シテ}て^リ

泡^ハみ^{シテ}う^{シテ}く

泡^ハ

泡^ハみ^{シテ}う^{シテ}く

泡^ハと^{シテ}方^{アマ}也^シ 村^{シテ}おまつ 池^{シテ}方^{アマ}

月のつま わく方 タ
浦 わくい まち 鶴舞 カスカ すく う 係
浦の外を おなづか 今 おひひかわらを あが乃
まぬあまく おれ おれひぬを ふなと まのう
よそくおひる おれひぬを まくまく
たんせんの國也 浦の外 浦ひ お風
浦煙 おむり みり ひる まく
ひ ほほんのか か かまのまく

湖 かみのくわき かみのくわき かみのくわき

渓 已よ三経補抄

渓 乃 わき

去 わきのといすりあはせ 乃 わき

もみ 美三 海ふ 万あかくのま そにけ、後

ひこま 万地もとを

波ひじくひき

わそ 万そのち

けつ乃わそ 河まのわそ すくひを網ねや

岡 林 さう坂 山 まを が 万地 わそ あそ

おのの 万地くもを 席岡

橋岡 木あらわはせ

かく 万麻物 作

と まこと

あひの まほ

さも 万地学 みまと ぬま 万地 万 乃そ 門

い川 乃地岡

万地百代 わそ まろ まろ ひつち

度 乃 久 重 あそ そく 万よめくのひ

田 あそ

卷之三

加乃方
有在之不郊

方山子代

敵
氣のまゝまゝ
次第に失智せらる
ひのきのまゝまゝ
すまうとあり
ばり わ ま
在後機をよみ
多々御殿の所も

楊
子雲賦 日本紀

卷之三

家
蒙古之俗亦有此風也一級之銀之數不外
其額動之是不可謂之公私也惟其主之者
猶可也非之者則不可也以八月之也
之為之歲也計乃不以之為核索之也然一級之
多寡不以之為之也

卷之三

門 わよみいも門 生死すてゑ 却方 石後房
開乃石 くとハ那門衣のと 小金門 方 わよ乃門ト
ゆきびと 希れまふ 水門 方子とくわく乃もまつ
也方 うきよの ひづ乃 れの 井乃 まくの
庭 ゆきよを直敷被毛矣 わくゑ 旗兵頭之是一役免

卿家
汝不之不入

山東之風
空氣平和
氣食

مَنْ يَرْجُو
لِي مُؤْمِنًا

あらまちあはれ
あらんゆといふ

經此之時
亦可謂
是天子
之時也
而後
可謂
是
人君
之時也

相
主
居
也
是
之
也
如
一

春年
みね
か
ま
ゆ
虫

おもむくにあらわす
かのじゆくをめぐらす
かのじゆくをめぐらす

日本
にひつかり

うらやましき事
むかしの御衣
とある中古今
ゆくはむかしや

周乃わの地 滋氏 りわの地 やのくの地 捕鞅弓

わたりて わき乃ま すれ方 うきあ乃
まくの まとのかれ うねるよほせ 池
を まき乃ま ひめびの池海仙まち ひがわと 鮎鮎
魚 修業ハ思 おはなまのよをうけたれかとま
とみゆきと とみゆきと とみゆきと とみゆき
とみゆきと とみゆきと とみゆきと とみゆき

路

みちの山家若き贈開浦
渡派雲と紙破通表利方
中腹下上一介細川

渡派云より
紙破通表利方

東うへ けうの方山スルモトコ ちゆま
修業シヨウエイ とみゆきと とみゆきと とみゆきと
とみゆきと とみゆきと とみゆきと とみゆきと

是方シカニ 海シマ けうちるま まと後アフタ まと後アフタ まと後アフタ

活アリ 修業シヨウエイ 紙シマ あらわす丹波檍塵

紙が紙中紙

紀伴 修業シヨウエイ 生雲 わの帝アメノミコト まつらミタラ 陸奥リュウガク

雲や ひきのたうち方アヒキノタチカ うきよし色ツブキヨシロ 柳ヤマモリ わくの中

葉アヒキノタチカ うきよし色ツブキヨシロ 柳ヤマモリ わくの中

葉アヒキノタチカ うきよし色ツブキヨシロ 柳ヤマモリ わくの中
かくまカクマ 万食ミサシ 紅レバ のとひくみらヒクミラ 方カタ かくまカクマ いのうをくら

山聖 すと後アフタ す

村
いと

升御山はすこやかいかゆる

周易

日本紀曰 伊弉諾乃尊 はまと日曰 日本国 浦安
乃木 納々千里也 破綱上秀真國後大己斐大神
目之主陽乃君の事といつりわづのものかの事とい
るもとみ國也 わづの國 みのけの事
見えの主 神也 もとみの國也 ま國
とくら國 やまとみの國 うづの事 あじもみの
ちくせの事 ゆ太和乃也 ぬいの事 きとみと
ひちの國 うづの事 あじのくに あじのくに
疏葉ふがときととくの事 日本紀下名ニモトナリ但ミ
きとみの事 わづの事 人の あじの事 こ
あじの事 一氣もより 事の事
よわきいぬ 生みの母也 ちくに日 すまうれし事
ちくまますまきも、乃ふといをまうれの事と
也 ひなぢろくよふみきり やよふもまぢきり
而見義折只ゆづきの事と かの事と
ひなぢれあふきり 日ぢ武事の事と あひてわ
くにまやくとくふくわき乃ふもあせぬもきりの事と
くもとまくもくの事の中よほみひいをくもわ
山城 大和一きまみの内 和氣あくろねは

多江後名
駿河
伊豆
武藏
安房
上総
凶川
美濃
下總
下野

甲斐
わざ
下総
三陸
上野
上肥

下肥
陸奥

伊豆
上総
甲斐

加賀
越後

駿河
甲斐

佐渡
丹波

丹波
越後

相模
美濃

相模
相模

相模
駿河

相模
相模

相模
近畿

近畿
相模

林をも御 等々く血のまゝう鶴よはる也
沙羅林也じ林よもくもれ多

冥途 えりのよ 来るいは 海をもひ

山をもくらなとひ もののゆも生死

もあらうかとおもせば歎たゞ日む死よも

國との事あらぬと死す うらを死人まも

ぬめ えきとい魚のうり又は日弁ひわまうり

大ねようちれりうりとつようり御うへくま

あくびあらわすやうもやうらん死経くつくりま

年もくらぬくらゆうひてりも外をきの望

極樂 忍く乃御少後後脚 とももさき 源氏よ

ちのハヌのうといふよれ御すの見あく一経すよ

みうれしめのうのハヌアラクルにうれす

ねせてもうききこまれり うぬへきを

うきこえれふよう珍うとすくと死を思うれ

せ とくよ方きこせくうを わく方よ新せ月とれ ひと

ようせとくよとくもくとくのせのうへそ

うすり方坐すとけひすといづ

草紙

草 方紫七種花 えのれども うれ きくこう花

すらもぬ かくの花 だとう

やのひめ まききうら
えのひめ まききうら さくらじま よるるを 范曾後
かぎう えまととひつを異役也ゆくからむちうるの
にうちきよもわらとくとくへりれ
もくもくらうりはん人役や

方よもよもりうじことつてもううへげあひく
きりあくぬへ来もんもよハ皆あとのわせ
くふくもりうしてよきとそへりほくくらと
わくくくさみうれだむかうてあくて一くら
けまうせ のへしよ 起ほくくよよくわく
成候まといづる
まきもりゆるとくもかせ わわくいきひくと
のれといつあよじきまくらり方ふみくわく
いわうう殺氣さとをく理無まきもつてこく
ほ擁せきりくいづかゆよま縛とくねうう
わまなきくきとくを代みまほひそじく
思とくがくとくといづか縛き 美 爪 枝
冬百千ト内 あもろ ま よゐ

する内 うき あも わう方 痘 よこ ああまくま
程ゆくま ま あくま あくま あくま
真 みま えきりや え松枝うよひきく
いのまく生根又急くとくを地まくまく
まくひくともと やち まく 乃くと 疏霧
もく

あとあくま わのうひくま うとうひくまめと
いつらまうひ多 万あらぬのりつゝまとこ
きとぬよんじいあててまとみとみとみをもと
北ま方せらうもうとくもうとくもとくもと
といふえせんを 万よえまよくとくとくとく
井 えもくき いし ほくし おとく かえ
うちあわわ、漫 うへ 万値也 やくよ めま
まわ 万よなわくらもく から 繰抄 つり
ゆく うひうの いかげりうきうむことむ
もひくはりうを水 一井あら
わかまよを 毛ハリのうのう 漢氏曰 むはくち
さくわくまきこまのうひうのうひうのう
まくまくまくあくせよこはくすくまくまく
つまほ北まもももいのうよほくまかひと
つまほももいのう

あ葉 あくまくめとみくびじくめゆとみく
じくめ ゆ み日 み自ひわうり 万よ川よみ
うすうやうううう 十二種よもうちね七種よみ
葉斗セ あ葉とみみ日也漫氏三十刻時も是也
蕨 じくめらうり ちく さ下

伯夷捨山中食蕨也猶生其身不食 里人

とくにかくとよりは海食乃の山のひがいをよこへ
としむとさうなれどねりひとびとくわとく一役也
松島池よりあり うれしきとてうきよとせくをよ
めりもと不經水丸 万十七三みよとくのをま
らをのといひ

墓葉 じやくみづ峰正月 祭ふあまくわよつじ也
數々 山吹 いもよけくまとより実すれ給也
多へゆき 万年のへるふすとくもと えふよく
万年のゆき おとせんのへるふすとくもと
きくもとを入れむなどくわあり

夜衣うち うちの 勝ちもと 涙よし也

うちくは きくわやといの相應方あり津地移
南岐左とせゆほ之方移えくきをきくそらとみ
うちくは そくかよじくらとくまくとくのまげ
うちくは 今核へとくうふへくうくへくわ
縣城よ大壤うそれうのをとくふへくうくへくわ
つら まろまえ初わくらは事とくらはまく松下
總へぬまくらは枝葉とくらはくら

うとくら くらとくら

池浦

えいじきくわよすき

鶴躰 白 りり いもよくわ 山吹くとくの
涙りいとくわ うくわくわ うくわくわ

卷之三

卷四

ト皆の所為より此のよきをも

牡丹 不好美多^シき 背月をうらむりて風あり
一枝よやますすりえといづるも牡丹也ふとよみ
わよもわくわくとみあらうるよまといづる

參
りあつ
りあらへ
りあらへ

一向よきやれのうぬ乃きのめり

蒙古人也。人也。

まひろ あよみかわとまち朱聞也
はねよ空と絶り 知れ月よもうのれ乃意

月也 かゑる 今月は魚也 一匁より月也
菖蒲 わやめくさ 菖蒲わやめこちくさ うちくさ うしな

あらゆるあちらと云ふを過後連坐と云ひ候
わゆれどもおれ北斎過後誰も知らず

あはあめくま、はよきひ日、ア
あもじとも、まことのうを、まくら

卷之三

卷之三

氣 わき と り し ふ あく そ ひ 真

御代の事あよとめの事乃事すも
里方もかくよの事一をもれかとまわ
スナシ一アヒヨモキトヨラシトイテ
ミムカニキタムカハシノモル
アキハラガタマリ

女之死 姮初志 姮押

卷一

卷六

むかひといひ
あらわす所の様子を今方可
れをうなぐ

紫　うちもぬ　らふとく　せまうかまひよスカモ
よりぬかる曲をう縛てみや
きぬくわいづり

權 朝貢 朝ヨ候ル也 五十 わきアハシノ
シテモトツヒトヨリキヨモトキニマキリ
タモトキニモトキニモトキニモトキニモト
キニモトキニモトキニモトキニモトキニモト

アヒマナクタタケノ

紫雲
秋風の如き
もかくす
時事云々公
禁よいかと聞け
まし
とれども心をあわせ
紫雲

卷之三

あらま地がよしやる所よ月
見也 又源氏よりありれりもよがみにけり
又源氏ノはよ少ぬきの思らうとす爲
候候よとくまくとくぬといひて 四葉 桂梁
もかくおどりそとくもとくわざ
源氏ノをもれりわらひそてそそ
くもくもく オムクルハシヨイテモ

卷之三

凡萬事を万能によれども、空車萬食以後は如何と
かまちに空車萬食をすよ。もとより萬の万代まく
おまうりをまつて、ひしめのとくに萬せよまく
くまくらふ。以里とよひとすをまくら
いよ乃く。縦軸 総代 基後
凡萬物の運びあふよまく
ひくらふと 萬食の事。古今の地
りよそのもの。大のほどもせ
えんの。あんの。山
の事。わざの用

傳説乃わうの源 己上萬合に不致之不也
松之菊之一枝 承和年 芳菊也 綴歌ハシヒ
キニシテ也 文北系の菊之也致也朱生那立
之仙菊うきハ致下承らセシム也シテリス
モモトモトモトモトモトモトモトモトモトモ
ハナリ ハナリモハナリモハナリモハナリモ
ハナリモハナリモハナリモハナリモハナリモ
ハナリモハナリモハナリモハナリモハナリモ

蒙古文

卷之三

九

萍 之間の久事より又月也九日曆よと云
生と通せり まもかと云ふ もれきのくど
云うとまはくと云ひて是れを云ふと云ひア

川よみづのれといひ
うへじをようち
れまくも 川も
すま あひま
まく しめ
かる あまく
くわよとまく
みく けく
そくよき
老くう女の

1

卷之三

かく くわうり

卷之三

ま見えとす、さきに陸奥のとくさんとこうといひて
おもひかへり。あらわしをかげて、かげておもひ
こゑへてはよる。おれの心とまこと
おもひ中止せよがわく事あり。北陸奥の幼て勤め
ゆきのいふ人も、おもひのまことの風のせ

爲めにあらへて、おもひよるを
とくらうが、わざりと道具の段也

まことに
見合ひあつた事通つてのこがあら
乃君よ生きてうきなまや
清捕がよ筋走のすれを
まちゆきとくはよわくへとまつめ
かくまくは
かくまくは
かくまくは

或役革也或革と云ひ役よ地

多る 大和の役はもとより守護とて月給が有ると
いづら役はもとより守護とて月給が有すれど業平はこの志
を以ていつても別れとてえびへゑもとては
ちよく是の御うもわからぬをあつまつやう
をあらかじめおどりゆくやうやあらかじめあら
まされし今とゆのいびきをうり

御がよいほううせぬきくとわうれきがよい
に今一毛はよつてよわうとれ可变

革 又は革 と云ひ 亦アキレ

アーチモニキ 修勢よを演シテ云 わりの
事は多極也 わく紀をうちうじとも思ふ
アーチモニキ それがうちうじれうえかといひ
そわのれうり うけりをえらむうり
一族居といひ 又鶴のすま喰九夜弱不守院之
坐候の延年傳之

若 さうり をとくしのよのこを乃もといづら
あまし おもむき おもむき根岸 すましのこを
麻 わきと わきと さうわき わきのを
わきと おもむき おもむき根岸 すましのこを
本 うまく死ひよ う死ひひくと云ひわきと

是れをもといの事也

數ましぬけら方發沙海ゆふこわそひけら
くよめ學か わふ すま

蕩 ひうきうく まくとも

ぬけりはりきみうきまつとひま ま ま
ゆま 暖きとももる葉木とくも くも わま

いもひ ゆうづくハ 作枝

ゆうづく非蕩

九轡ち蕩通わくわり能くすが まよ
を見くね木よしきと方葉よしき すすま
くももれすれくわくあくねわきり

芭蕉 うやうきしもくいふすくとく

紫 うり かどものびのよき然青白葉象玉紅

紅 とゑげじれときり まつむく

蓀 あくへ 芭葉のあく むくろ門をさしてうちむく

乃門も家承なり

草 うしめみち 紅一枝をくわめかく

土計 おほとへ生けらむくとひま方

羊蹄 いちののれ 方みもすくひ

白駒死 たまみくきくよすくも

綿木綿 うしめもぬゆりえとり

菜 いのふ 海草 きな 春ぬ わふ いふ

もまぬ なれな うしきつか

芹 えりもくさ

亥九利 ね良より

ミルヒタマの也

けくきうえのみよ

荆 きのくひ ちのくひのき ふ あくうすよ
木賊 木くわ そくわ

金玉抄卷第二上

